



防大 学校長 久保文明

「いわゆる「学校長要望事項」を素材として」

本年度も投稿の機会をいただき心より感謝しています。最近の防衛大学校の状況について、少しばかり報告させていただければ幸いです。

令和3年4月1日に学校長に赴任して数週間が経った頃のことでした。秘書から、「学校長要望事項」なるものを用意してほしいと言われました。それがどのようなものかまったく見当もつかず、ともかく当惑しました。多くの自衛隊の基地や駐屯地では、司令や師団長要望事項として掲示されているという説明を受けたような気がします。それで完全に理解したわけではなかったのですが、雲をつかむような思いをしながら、とりあえずない知恵をひねっていろいろと考えてみました。その時の「作品」が以下のものです。

(職員へ)

防大生の可能性を信じよう

(学生へ)

自分たちの可能性を信じよう

その後、これがどのように扱われているか、なかなか知る機会に恵まれませんでした。令和三年から四年にかけてはコロナ禍のため、学生舎を訪れる機会が非常に少なくなっていました。ようやく再開された学生舎研修の際(どの学生舎であったか記憶が定かではありませんが)、1階の入り口近くの壁に「学校長要望事項」が掲示してあることを知りました。ここで初めて、「なるほど、このような形で学生の目に触れるのだ」ということが確認できた次第です。

だいぶ日時が経ってからのことですが、ある時たまたま話をしていた学生から、「学校長要望事項」をととても気に入っている、「あれ、いいですね」と言われました。壁に掲示してあってもそこを通る人々が注目し、また覚えてくれるとは限りません。この時、初めて少なくとも一人は見てくれ、しかも気に入ってくれていることを知りました。

つい最近になって、秘書から実は毎日出入りしている学校長室の隣の秘書室の壁にも貼ってあることを知らされました。言われてみると、確かにそこにしっかりと貼ってあるではありませんか!

灯台下暗しとはまさにこのことでしょう。学生諸君が読んでいなかったとしても責めるわけにはいきません。

この話題を持ち出した理由は、その誕生の経緯はともかくとして、これらの言葉は最近の防大の変化の様子をよく表現していて、ほぼ五年が経った今、率直に言っただけが意を得たりという感覚がないわけではないからであります。

変化の一つは学生間指導で起きました。訓練部が学生隊長など学生隊幹部の選抜にあたってパワーハラスメント的傾向を持つ学生を避けるように努力してくれました。学生もよくそれを理解しました。その結果、学年間の関係が随分変わったようです。一つの兆候は、第一学年で四月一日に着校し、同五日に入校しない学生数が、令和五年から顕著に減少したことであります。コロナ禍以前は三十人前後が、場合によるとさらに多数の着校者が早々と防大を去っていましたが、三年前からそれは十名前後まで減っています。新二学年に対する上級生によるカッター競技の体力錬成指導の中身を、奨励型に変えたことが少なくとも一つの理由のようです。それまでは、着校者は第二学年になっても上級生に厳しくしごかれている先輩たちの姿を学生寮で目撃し、衝撃を受けていた可能性があります。

四月冒頭のみならず、一学年時を通じて退校者は減少しました。その結果、たとえばコロナが猛威を揮った第四学年(第70期生)の学生数は395人(内留学生21人)であるのに対し、第三学年は481人(21人)、第二学年は522人(24人)、そして第一学年は

539人(21人)となっています(令和八年初め時点)。

昨年三月に卒業した69期生は、このような学生間指導のあり方を見直す流れに乗り、学生舎での朝の清掃を一学年にのみやらせず、四学年も一緒に行うようにしました。四学年の間では異論もあったと聞いていますが、ともかく実施に移されました。入室要領や外出の際の容儀点検なども随分緩和されたようです。最近の学生隊長の一人が卒業文集に書いています。一学年のみが厳しく指導されるのはおかしいのではないか。

まことにもっともなことでもあります。

長期にわたり、学生間指導のあり方を変えるのはほぼ不可能と思われてきました。しかし、学生諸君と訓練部は、不変・不易とみなされてきたことであっても実は変えることができるのだということを証明してくれました。彼らの努力に心より敬意を表したいと思います。

学生指導とは関係ありませんが、様々な分野での学生の活躍も注目に値します。令和六年の開校記念祭から女子学生が棒引きという独自の種目を開始しました。まだ二回実施したのみですが、早くも男子学生による棒倒しと並んで目玉競技となっています。米陸軍士官学校主催のサンドハースト競技会には原則として毎年参加し、体格差に苦しみながらも善戦しています。派遣学生として選抜されるまでの厳しい訓練を考えると、志願学生の意欲には頭が下がります。イタリアのサンレモ国際人道法研究所で開催される「士官学校武力紛争法競技会」では、指揮官に要求される国際法の知識を短い時間で英語で回答することが求められます。防大生はこれに毎年参加してきましたが、令和6年には参加した3人全員が見事2位と3位で入賞しました(全員が女子学生でした)。大変な快挙だと言えます。

アメリカ、フランス、韓国の士官学校への、あるいはカタールやドイツへの語学での長期派遣は相当前から軌道に乗り成果を上げていますが、昨年からは防大の第二学年から三名がアメリカの陸海空三つの士官学校に一名ずつ合格し、現地で頑張っています。彼らはそれぞれの士官学校卒業と同時に防大の卒業証書も授与され、陸海空自衛隊の幹部候補生学校に入校することになります。

これらすべては、防大生がもつ可能性を示すものであります。

令和3年以降新たに導入された校外研修(インターンシップ)としてはすでに JICA および東洋文庫において実施されていますが、拡充を計画しています。防大生はどうしても防大・自衛隊の世界に閉じこもりがちですが、少しでも外の違う世界を見てもらいたいとの希望から実施しているところです。

以前、誕生日を祝う月例の昼食会が開かれていて、そこでは学生と教職員が一堂に会して学生代表が提供してくれる話を聴きました。ちなみに、この行事はコロナ期中止になり、まだ再開されていないようです。ある時の演題は99%と101%というものでして、毎日行う努力の成果における達成率の差がわずか2%であっても、前者は確実に退行し、後者は直実に進化する。その差は1年、3年と経つにつれ巨大なものとなる、というものでした。とても良い話だと思いました(もっとも元ネタはある財界人が語ったことであると本人が触れていました。インターネットでも簡単に検索できます)。少しずつでも毎日着実に前進する。大事なことであります。私が防大生から学んだことの一つです。

ただ、私としては同時に、人生では100の地点から一挙に150や200まで引き上げてくれる瞬間や出来事もあることを指摘したいと思います。それは友人や先輩などからの一言からのこともあれば、読書から得られることもあります。もっとも確実に飛躍できるのは、外の世界、とくに外国で生活することです。それは、長年の常識が実は常識でないことを頻繁に教えてくれます。要は、毎日の着実な前進を実践しつつ、若いうちは機会があれば積極的に、自衛隊あるいは国の外に出るように心がけて欲しいということです。

中曽根康弘首相は、防大での卒業式で幹部自衛官たるべき防大生に対して、「永遠の求道者」であることを求めました。中曽根首相が「道」という言葉が使われたのは、「柔道」「茶道」などと同様、そこに単に技術だけでなく精神的修養と不断に高みを極める要素を認めていたからであろうと推測しています。むろん、最近では「ラーメン道」などという表現も散見され、「道」もやや安易に使われる傾向があるのかもしれませんが。いずれにせよ、知識や体力だけでなく、総合的人間力での前進も意味していると推測されますが、防大生には在学中はもとより卒業後も、毎日の地道な努力と同時に、一挙に飛躍する瞬間も積極的に掴みに行つて欲しいと願っています。

もとより、学校側が努力すべきことが多いことも事実です。

現在、理工系を中心に一部の希望する学生について、直接研究科に進学する道が開けないか検討しています。また、これは直接には教官側に関係する事柄であります。数年前と比較すると防大の研究費は格段に増えており、研究機関としての防大の

役割と存在意義も評価されつつあると感じています。防大自身、自らの可能性を信じてきたわけですが、それは少しずつ開花しているといえるかもしれません。さらに防衛装備庁と分業しながら、基礎的な分野の防衛研究を担う研究上の役割を強化できないかとも考えています。日本の安全保障という点でも、貢献が求められている分野ではないかと想像しています。

採用(入学)試験についても、ここ五年ほど大小さまざまな工夫をすることで、18歳人口が減少する中、防大は何とか受験者数を確保してきました。今年度実施した入試に関しては、受験者数は微増でした。入試課の努力を多としたいと思います。もっと知恵を絞れば、より優秀な学生を確保できるかもしれません。これを考えるのは学校側の責任です。

勉強でいえば、残念ながら一定の学力差が存在するのは否めないところかもしれません。訓練や勤務態度、そして任官意欲等についても、非常に意識の高い学生もいれば、そうでもない学生も多数いるというのが実態でしょう。どの教育・訓練機関にも存在する問題かもしれませんが、指導する側にとって、やりにくい状態が生まれているようです。このような状況でよくある対応方法は、どちらかを切り捨ててしまうことかもしれません。とくに、意識の高い学生からの問題提起に対して、「他の学生はついていけないからダメ」と言って却下し、結果的に自衛隊に最も必要とされている優れた潜在的指導者を失望させてしまうことは、もっともあってはならないことです。両立が難しいのは否定できません。しかし、我々防大は教育・訓練の専門組織、いわばそのプロである以上、両方に目配りするように全力を尽くすべきではないか、と信じます。のみならず、我々にはそれをやり遂げる能力があるのではないか。そう信じたいものです。

最後に、冒頭の「要望事項」を再掲させていただきます。ただ本稿では末尾に一つ付け加えてみました。いかがでしょうか。

(職員へ)

防大生の可能性を信じよう

(学生へ)

自分たちの可能性を信じよう

(そして、防衛大学校すべての職員・学生へ)

防大の可能性を信じよう